

大塚敬節
責任編集
矢数道明

近世漢方醫學書集成

24

宇津木昆台 一

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 第I期・全30巻

ISBN4-626-00072-X C3347

近世漢方医学書集成 24 宇津木昆台(一) 第I期
全30巻

昭和五十五年一月二十二日 第一刷発行
昭和六十一年四月二十五日 第二刷発行

編者 大塚敬節

発行者 中村安孝

発行者 株式会社 名著出版

東京都文京区小石川三ノ木五
電話(東京)二五〇番代
振替口座 東京七二〇七四九番

製版所 株式会社 日本写真製版所

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 株式会社 辻本製本



予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

ISBN4-626-01217-5 C3347

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫



宇津木昆台肖像

凡 例

一、本書二十四卷「宇津木昆台(一)」には、『古訓医伝』卷一―卷六(「医学警悟」一―六)までを収録した。

一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮小し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等は、全て省略した。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

古訓医伝 版本(天保十二年版)二十五卷二十五冊(大塚敬節・矢数道明所蔵)

一、解説は大塚敬節(北里研究所・東洋医学総合研究所所長)が執筆した。

一、巻頭の宇津木昆台肖像は、藤浪剛一著『医家先哲肖像集』(昭和十一年、刀江書院)によった。

異色ある宇津木昆台の医学

大塚 敬 節

思い返せば漢方専門で東京の牛込で開業して二、三年たった昭和八年に、何の風の吹きまわしか、神戸の県立病院に入院中の肺結核の患者から往診を依頼してきた。

神戸からの帰路、京都で汽車を下車した私は寺町の佐々木竹苞樓にたちよった。

すると、珍しいものがありますよと云って、奥から一抱えのきれいな和本を主人が出してきた。

『古訓医伝』二十五巻のうち「薬能方法弁」五巻が欠けているだけで二十巻は全部が揃っている。店先で、ところどころをひろい読みしている中に、私の胸は高鳴ってきた。

貰った往診料では足りないので財布の底をはたいて、ありったけの金をおいて、私は大切に『古訓医伝』を抱いて帰ってきた。

この『古訓医伝』には、天保丙申（天保七年）冬十一月に、宇津木益夫の序文があるが、その

後、私は神田の一誠堂で、明治十年代になってから、刊行せられた二十五卷本を入手した。

五足齋を自称した昆台

宇津木昆台（一七七九—一八四八）は五足齋を自称していた。これは自ら、神・儒・釋・老・医の五つのものについて夫々得るところがあり、自ら足れりとするの意であるが、平安の人もまた昆台に許すに、この五者を以てしたと伝えられている。ことに仏においては五山の僧徒が皆来りて、業をうけ、籍を昆台の仏門におくもの凡そ千余人であつたというから、その世評をうるべきである。ところで、医の門に遊ぶものが何人あつたかは、明かにされていない。



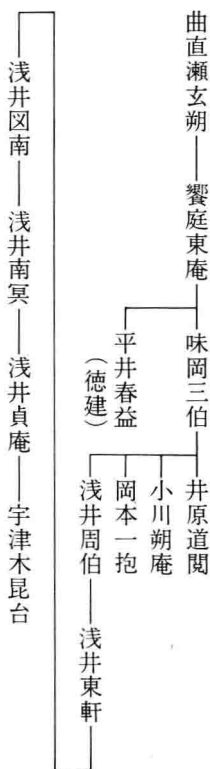
宇津木昆台が葬られている
南禅寺塔頭・慈氏院



宇津木昆台の墓
子の宇津木逢夫の碑文、
が刻まれている。

昆台の系譜

昆台の医としての系譜は次の通りである。



昆台は名を益夫、字を天敬、俗称は太一郎で、昆台はその号である。尾張名古屋の人で、幼時より学を好み、松田棣園を師とし、医を浅井貞庵、平野龍門に学ぶ。十八歳の時、京に出て、諸大家の門に学び、ついに京にとどまって、広福王府に仕えて、古医方を提唱した。昆台の唱えた古医方が、どんなものであったか、平易な日本語で二十五巻にわたって書きとどめた『古訓医伝』に詳細が明かにされている。

『古訓医伝』の巻一から巻六までは、「医学警悟」で、この医学を学ばんとするものにとって、最も大切な問題を取りあげているが、巻頭の立志弁は特に重要であるから、熟読しておくべきで

ある。次の正名弁では、『傷寒論』をあげて、

「治病の方書、其右に出る者なし。是に於て凡そ医たる者、傷寒論を以て標拠として朝夕誦読せざることなし。然れども各所見ありて、一家言を立てるが故に、後進の徒、多岐亡羊、適従する所なし。嗟乎悲しむべきことならずや。余此書を考るに、宋の成無已始めて註せしより以来、晩近に至るまで、註書凡そ数十百部、皆所見ありて、其理義を述るといへども、先づ第一に、傷寒論と云名を看破すること能はざるが故に、尽く其名義のために關係せられて、其套圍を脱すること能はず。是を以て其説所、拠るべきの論ありといへども、皆其肯綮を失するが故に、これを実病に徴するに足らず。夫れ医書にして実病に徴するに足らざるときは、畢竟無用の剩言なるのみ、何の理義かあらん。これ余が少年より師説を聞き諸註を觀て、大いに疑惑を生じたる所以なり。是に於て憤を發して、此書を誦読すること三十余年、其旨趣を察するに、六經を以て標題となし、傍ら傷寒中風の其部位を犯す者を以て各其篇中に編入して、病の由て来るところ、各表裏内外の別あることを徴せり。是に因てこれを觀れば、傷寒一病を療ずるの書にあらず。万病を治するの規範自ら其中に備れり。何となれば、六經病は内より發するの証にして、外より来り侵すの邪に非ず。中風、傷寒は外より来り侵すの病にして、内より起るの証にあらず。是を以て内より太陽部位に發する者を太陽病と云ひ、陽明に發する者を陽明病と名づけ、少陽に發する者を少陽病と名づく。三陰も亦然り、皆内より發するの病なり。又外より太陽部位を動揺するものを太陽中風と

曰ひ、陽明を動揺するを陽明中風と曰ひ、少陽を動揺するを少陽中風と曰ふ。三陰も亦復然り。傷寒に至ては然らず、其来り侵すの勢、緊密強悍にして三陰三陽の一部位を分たず、一身表裏内外の氣血水を壅塞して、其病勢六經病并に中風に過たること、能く人の知る所なり。故に太陽を侵して陽明少陽を兼る者あり、陽明を侵して太陽少陽を兼る者あり、少陽を侵して太陽陽明を兼る者あり、三陰も亦然り、必ず表裏内外を通過して、其勢強悍なるものなり。故に陽証にして陰を兼る者あり、陰証にして陽を兼る者あり。陰陽忽に主客転換する者あり。故に偏に傷寒と曰て、三陽三陰の字を冒らせたる条なし。後の説者、其義を知らず、其理に達せず、中風と同じく六經の字を蒙らせて、太陽傷寒、陽明傷寒、少陽傷寒、太陰傷寒、少陰傷寒、厥陰傷寒と謂ふ。此風寒の風寒たる所以を知らずして、泛然として言を立るが故なり。是を以て之を推すに、此書、傷寒論と名づくべきの故なし。固より傷寒一病を論ずるの書に非ず。論の字も亦着落なし。夫人身の病、必ず外、風寒に感じ、内七情に傷れて生ず。此時に方^{かた}つて必ず風寒熱の主客あり。その風寒熱の主客に各表裏内外の異なるあり。その表裏内外、又各々陰陽虛実の別あるときは、其病状愈々出でて愈々窮りなし。一定を以て論ずべからずといへども、其病状を總括するに至ては、風寒熱の外に出でず。其風寒熱、氣血水の変の外に出ざるときは、万病まさに風寒熱を以てこれを約すべし。然らば、内傷外感、其由て来るところ異なりといへども、風寒熱を除いて病状なきときは、風寒熱の万病の統歸たるや疑なし。今この傷寒論既に傷寒一病の書にあらず、万病の治法其中に具

備するときは、宜く風寒熱を以て名とすべし。

按ずるに、前漢書芸文志に云、風寒熱十六病方二十六卷、ただ其目錄のみありて、其書伝はらず、想ふに、此れ先秦の遺籍ならん。其書の湮没したる、実に惜むべきの甚しきなり。今余傷寒論を取て、其古文を表章し、再びこれを撰次するに、毎条咸く風寒熱の病状を陳列して、これが治方をつながざるはなし。其書亡びたりといへども張長沙傷寒論中に編入して、仍今日までも伝はりたること明なり。其序中に所謂、勤求古訓、博采衆方と云ふ。乃ち其証なり。此れ張長沙の賜にして、医家万代の龜鑑なり。然るに世医、徒らに、傷寒論を尊信して、其中に風寒熱病方を編入したることを知らず。又其文の論体に非ざるを察せずして、傷寒一病を治するの書となす。或は一二の英傑、これを諸病に施す者ありといへども、傷寒を治するの方を以て、活用して他病を愈すにすぎず。これ深く風寒熱の万病を総括することを省みざるが故なり（以下略）。

昆台が『傷寒論』を「風寒熱病方経篇」として、『古訓医伝』の卷七より卷十三までに、平易に解説し、『金匱要略』を「風寒熱病方緯篇」として卷十四から卷二十までに解説しているから、落ちついて読まれることを切望する。

「医学警悟」では、正名弁の次に、八条目弁がある。

八条目によつて、診断、治療を誤まらぬように、頭悩をうまく整理する方法で、詳しく解説している。

一、宿。二、因。三、本。四、病。五、診。六、証。七、名（病名）。八、治。

以上、八条目を用いて、診断、治療する実例を中々うまくのべているので、このところも、熟読が必要である。

次に、風寒熱弁、経緯弁、三陰三陽弁、表裏内外弁があつて、卷二には脈候弁、色候弁、腹候弁があり、昆台独特の記載があつて、興味がある。

もつとも力を注いだ「風寒熱病方経篇」

昆台が『古訓医伝』の中でもつとも力を注いだものは、「風寒熱病方経篇」（卷七—卷十三）である。

昆台は、『傷寒論』は一大文章であつて、前後の關係のない片々たる章句を寄せ集めたものではないとして、前後の文章との關係を詳しく考察して、章句を移動して、それによつて解説を下している。この点は注目に値すべきところである。

「風寒熱病方経篇」（卷十四—卷二十）は、『金匱要略』に該当するところで、たてのいとである経に対して、よこのいとである緯の關係であり、この経と緯を用いて完全な一枚の布を織るよう、この経と緯を応用して、はじめて万全の治療が可能になることを説いている。

最後の卷二十一から卷二十五までが「藥能方法弁」で、その真味を熟読するに値するところである。

先づ「藥能方法弁」の序を読むに、次のようにのべている。

「上古は一藥を以て一病を療す。神農本經以下、本草の載する所を以て觀るべきなり。中古以來、人、各々多能を競ひ、一人にて、數職を兼ねるに至る。則ち其病も亦數症を兼ねる者多し。此れ方法の由て起る所なり。今其方法の起る所以を推究せんと欲せば、則ち一藥の能否を詳にするに非ずんば得て知るべからざるなり。蓋し古今の匠人、各々親驗する所有り。而して藥を用いるの運量、処置同じからず。則ち其の能否、未だ始より一定ならざるに似たり。之に加ふるに、寒、熱、溫涼、五行、五色等を以てす。則ち多岐亡羊、殆んど適從する所無きなり。是を以て一藥の能否、未だ詳審ならざるに似るなり。

夫れ病を異にして、其藥を同じくし、病を同じくして、其藥を異にする者、往々にして焉れ在り。則ち須らく其の病を作すの本に就いて其藥の能否を弁ずべし。然れども、病、實して、本虛する者あり。病虛して本實する者あり。病と本俱に虚する者あり。病と本、俱に實する者あり。病、本、虚實を兼ねる者あり。則ち其藥の能否、未だ遽かに詳かにせざるなり。且つ一藥の能否、他藥に合して、其能否を転ずる者あり。則ち其藥能を弁せんと欲するは、實に其れ難きかな。但、意推臆斷を以てその影響を髣髴するのみ。此れ乃ち藥能の方法の明解なき所以なり。今藥能を弁

ぜんと欲し、併せて、方法に及ぶ者は、学者をして一薬の能否を知り、その方に因つて、轉換窮^{くわんげつ}り無きを知らしめんとすなり。

凡そ病者に臨むに、先づ陰陽虚实を詳にして、而して後、此書に就いて、以て、其薬能の方法を究むれば則ちこいねがわくば暗投漫処の患無からん。因つて経緯篇の後に附して以て二三の子に授く。

天保八年丁酉夏五月

昆台益夫識す」

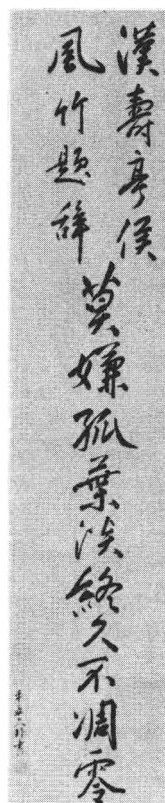
「薬能方法弁」は桂枝に始まるが、その冒頭の一部を引用してみよう。

「桂枝 肌表の気を発散し、氣逆上衝を和し、裏気を肌表に達し、皮膚を疎通す。是を以て、頭痛発熱を和し、汗後の身疼痛を治し、惡風をゆるめ、爵滯を通ず。一切表氣の和せざる者、皆これを主る。然りと雖も、其方の薬味に合して、裏氣までも疎するの功あり。各薬の条と參觀して其活用を知るべし。一切皆然り、以下桂枝の諸方を弁じて左に示す。其能を弁知すべし。後世、桂に多種あり、又枝幹等を分ちて、其能を異にすることを説り。一味の能、猶ほ其詳なることを弁じ難し。一味にして多種を弁じて、功を異にすること余が取らざる所なり。ただ通じて一物となして、其機能を自得すべし。諸薬皆これに倣へ。

夫れ古訓の桂枝を用ゆるや、表裏虚实用ざる所なし。先づ表証に在ては、桂枝湯、葛根湯、麻黄

湯、大小青竜湯、桂麻各半湯、桂枝越婢湯、これ正症にして桂枝の繋る者なり。其功専ら発散にあり、変証に至りては、新加湯、桂枝甘草湯、苓桂甘棗湯、苓桂朮甘湯、五苓散、茯苓甘草湯、救逆湯、桂枝甘草竜骨牡蛎湯、桂枝人参湯等、表氣の鬱滯を和し裏氣表位に迫りて、氣逆上衝を和するを以て主とす。小建中湯の如きは、裏氣を表位へ達して、裏虚を順らすの功あり。桃核承氣湯は裏実にして、其氣上逆して如狂なるを主とす。固より桂枝一味の功に非ずといへども、裏虚裏実俱に桂枝を用るを以て、病証の変化に随つて用藥の自由自在なることを察すべし。

その他柴胡部類、附子部類、石膏部類、苓連部類、大黃部類、諸藥部類に、桂枝を組合せたる方、枚挙するに暇なしと雖も、其大概を説て、學者に示さん。又桂枝湯加減の方に至ては少しの転変に因て其活用を見るに足る。并に分量の多寡異同、各其陰陽虚実に随ふて、桂枝を用ゆる精練綿密なること、後世方書の能及ぶ所に非ず。上に説く所の功能を知りたるのみにては、桂枝の功を尽したりと謂べからず。故に繁文を省みず、一々其方意を弁じて其概を示す。其精密に至ては、短筆の能及ぶ所に非ず。學者まさに諸を実地に徴して其蘊を自得すべし（以下略）。



書 宇津木昆台の
漢壽亭侯
風竹題辭
莫嫌孤葉淡終久不凋零 平益夫拜書
(大塚敬節所藏)

宇津木昆台

一